日東医誌 Kampo Med Vol.63 No.5 340-346, 2012

理論と論説

奥田謙蔵『漢方古方要方解説』の方剤分類

――我が国における類方分類の歴史上での位置付けと将来の課題――

坂井 由美　並木 隆雄

千葉大学大学院医学研究院和漢診療学，千葉，〒260-8670 千葉市中央区亥鼻1-8-1

Kampo Formulae Classifications in Kenzo Okuda's *Kampo Koho Yoho Kaisetsu*

—The Historical Positioning of Classifications in Japan and Future Issues—

Yumi SAKAI　Takao NAMIKI

Department of Japanese-Oriental (Kampo) Medicine, Graduate School of Medicine, Chiba University, 1-8-1 Inohana, Chuo-ku, Chiba 260-8670, Japan

Abstract

At present numerous Kampo formulae are used in Japan, and how we classify Kampo formulae into groups has become an important issue. Nevertheless, in recent-year Kampo formularies or prescription manuals, there is almost no comprehensive classification of all Kampo formulae covered by the older *Koho* or *Goseihou* schools, or recent Chinese Medicine. Furthermore no research has been performed on Kampo formulae classifications. From a historical point of view, however, many classifications were made in formularies and prescription manuals of the Edo period then the early Showa period.

Kenzo Okuda, who belonged to the *Koho* School, was a Kampo physician in the early Showa period who attempted to make classifications of Kampo formulae. In this review, we researched his classifications as based on *Ruihou*-classifications, in other words the systematic collecting Kampo formulae by points of similarity between herb formations. Then we also studied the history of *Ruihou*-classifications preceding Okuda's, and considered problems lying ahead for classifications of Kampo formulations in Japan.

Key words: Kenzo Okuda, Kampo formulae, classification of formulae, *Ruihou*-classification, the *Koho* School

要旨

現在、日本では数多くの漢方処方が用いられており、それらの漢方処方群をいかに分類するかは重要な課題である。それにもかかわらず、近年日本で出版されている漢方処方集や方剤解説書の中に、古方・後世方・中医処方を網羅的に分類しているものはほとんどなく、漢方処方の分類法に関する研究も行われていないのが実情である。しかし歴史的に見ると、江戸期から昭和初期にかけて、漢方処方を分類ごとにまとめて編纂した処方集や方剤解説書が多数存在している。そのような方剤分類を試みた医家の一人に、古方派の奥田謙蔵がいる。本論文では奥田の著書に見られる「類方分類」の内容について検討を行い、さらに奥田に先行する我が国の「類方分類」の歴史について調べ、今後の日本における薬方分類の課題について考察した。

キーワード：奥田謙蔵，漢方処方，方剤分類，類方分類，古方派

緒言

2010年5月からWHO ICTM（International Classification of Traditional Medicine）プロジェクトが正式に始まり，ISO（International Organization for Standardization）でも2009年に中医学の専門委員会（TC249）が設立される等，最近になって伝統医学の国際標準化への動きが益々活発化している。中国・韓国等はすでに処方の分類・規格化を国家レベルで強力に推し進めており，日本においても漢方処方の国際分類のためのモデル案の作成が急務となっている状況にある。

現在，日本では数多くの漢方処方が用いられており，漢方エキス製剤として保険適用となっている処方が148方，また『実用漢方処方集』第三版（じほ

受付：2012年1月13日，受理：2012年3月8日

う，2006年）に収載されているものとしては約1,600の処方がある[1]。これらの漢方処方群をいかに分類するかは重要であるが，それにもかかわらず，日本で出版されている漢方処方集や方剤解説書の中で古方・後世方・中医処方を含めて網羅的な分類を行っているものはほとんどなく，漢方処方の分類法に関する研究も行われていないのが現状である。

しかし歴史的に見ると，日本でも江戸期から昭和初期にかけて，漢方処方を分類ごとにまとめて編纂した処方集や方剤解説書は，多数存在している。その中で，古方派の奥田謙蔵が昭和期に初めて処方分類を試みた薬方解説書を著した。方剤の分類法には，「症候別の分類」，「薬効別の分類」，「イロハ順の分類」などがあるが，奥田の用いた「類方分類」は，主方（中心となる代表処方）の名称を分類項目として立てそれと関連する処方群をまとめたものであり，『傷寒論』『金匱要略』の方剤を重んじる日本の特徴的な処方分類法の一つとして重要であると考えられる。

そこで奥田の類方分類の内容に関する検討を行い，さらに奥田に先行する我が国の類方分類の歴史について調べることで，奥田の分類の歴史的位置付けと今後の課題について考察した。

奥田謙蔵の略歴と著書

奥田謙蔵の『傷寒論講義』[2]奥付の記載と秋葉哲生の『奥田謙蔵研究』[3]を参考に略歴をまとめた。

奥田謙蔵は1884（明治17）年4月13日，奥田光景の二男として，四国丸亀で生まれ，徳島市に生育。ちなみに奥田家はその祖を藤原鎌足に発し，中途より代々三井姓を名乗っていた。祖父三井公圭翁は，吉益東洞の門に学び，また遠く長崎のシーボルトの塾に遊んだ篤学の士であり，その長子の光景氏をして，友人奥田氏の後嗣とされた。1915（大正4）年，日本医専を卒業。父・光景のもとで，『傷寒論』，『金匱要略』を主とし，『素問』，『霊枢』，『難経』，『本草綱目』，『温疫論』，『十四経』〔筆者注：『十四経発揮』を指すと考えられる〕，その他を従とした基礎教育を受けた。1918（大正7）年上京して，府下小河内村の村医として漢方専門で勤務。1921（大正10）年，栃木県那須郡大木須村に漢方医術をもって開業。1922（大正11）年，父光景病気のため徳島に帰郷。家業を手伝う傍ら，さらに父より漢方の教育を受けたが，1923（大正12）年に父・光景が死去。1924（大正13）年，再上京。1925（大正14）年，本郷区湯島新花町の加藤玄伯医院で，加藤氏と共同経営の形で漢方を標榜して開業。こののち奥田は，「深交を結び，生死を誓って共に此の道に専念したる」という間柄にあった湯本求真の著した『皇漢医学』第一巻（1927（昭和2）年刊行）に，跋文を寄せている。また1933（昭和8）年から『古医道』に「傷寒論講義」（一）～（六）を連載している。1936（昭和11）年，本郷根津宮永町の新居に移転。1944（昭和19）年，空襲熾烈となったために栃木県長畑に疎開。1950（昭和25）年，疎開地より本郷根津宮永町の自宅に復帰。1953（昭和28）年，千葉県市川市菅野に移転し，患者の診察の傍ら，著作に専念した。また，奥田は奥門会を主宰して多くの弟子を育てた。門人には，和田正系，藤平健，長濱善夫，小倉重成，伊藤清夫，石野信安，鍋谷欣市，遠田裕政らがいる。1950（昭和25）年，1953（昭和28）年には，千葉大学医学部東洋医学研究会自由講座において講義を行っている。1961（昭和36）年3月9日，78歳にて逝去。

この略歴からすると，奥田の見識は，『傷寒論』『金匱要略』は言うに及ばず，『素問』『霊枢』や『温疫論』など多岐にわたっており，古方・後世方にも通じていることがうかがえる。

奥田の著書としては，『皇漢医学要方解説』と『傷寒論梗概』の二書があるが，この中で方剤分類が取り入れられており，その分類の記載の変遷がある。1934（昭和9）年に著した『実験漢方医学叢書　第五　薬方解説編　皇漢医学要方解説』[4]（以下『旧皇漢要方』と略記）は『傷寒論』『金匱要略』の主要な方剤180処方を21類の類似の方剤ごとに分類し，解説を付したものである。本書は1939（昭和14）年に，『皇漢医学要方解説』として発刊された（184処方，31分類）。その復刻版[5]が1973（昭和48）年に医道の日本社から『漢方古方要方解説』と改名され発行されている（以下『古方要方』と略記）。また奥田のもう一つの著書である1959（昭和34）年に発刊された『傷寒論梗概』[6]薬方篇でも，『傷寒論』処方に関して同様の類方分類の形式を採用して111処方を18分類に分けている。なお上記以外に，遺稿として弟子の手により1965（昭和40）年に『傷寒論講義』[2]が刊行されている。

表1 『実験漢方医学叢書 第五 薬方解説編 皇漢医学要方解説』と『漢方古方要方解説』の処方分類項目の比較

『実験漢方医学叢書 第五 薬方解説編 皇漢医学要方解説』 1934（昭和9）年	桂枝湯類・麻黄湯類・白虎湯類・小半夏湯類・柴胡湯類・橘皮湯類・栝蔞薤白白酒湯類・薏苡附子散類・瀉心湯類・白頭翁湯類・梔子湯類・大陥胸丸類・大陥胸湯類・腎気丸類・防已湯類・抵当湯類・芎帰膠艾湯類・承気湯類・赤石脂禹余粮湯類・四逆湯類・類族不詳の方・兼用方
『皇漢医学要方解説』 （のち改名『漢方古方要方解説』） 1939（昭和14）年	古方： 桂枝湯類・葛根湯類・五苓散類・麻黄湯類・柴胡湯類・白虎湯類・承気湯類・大黄消石湯類・抵当湯類・瀉心湯類・黄連湯類・半夏湯類・人参湯類・甘草湯類・四逆湯類・薏苡附子散類・橘皮湯類・栝蔞薤白白酒湯類・瓜蔕散類・白頭翁湯類・腎気丸類・梔子豉湯類・赤石脂禹餘糧湯類・防已湯類・芎帰膠艾湯類 兼用方： 巴豆剤・軽粉剤・大黄剤・甘遂剤・雑方 付録 掌善医院方函雑方

下線のある項目：両書の分類項目に相違が見られる部分

表2 『傷寒論梗概』の処方分類項目

『傷寒論梗概』 1954（昭和29）年	桂枝湯類・麻黄湯類・葛根湯・柴胡湯類・梔子湯類・承気湯類・瀉心湯類・黄芩湯類・半夏湯類・白虎湯・五苓散類・四逆湯類・理中湯類・陥胸湯類・抵当湯類・甘草湯類・桃花湯類・類属不詳の方

下線のある項目：『漢方古方要方解説』にない分類

奥田謙蔵の処方解説書の処方分類について

明治期以降において古方の処方分類を行った嚆矢は，奥田謙蔵であると思われる。明治から昭和初期には西洋医学の普及により漢方医学が排斥されて急速に衰退したが，漢方医学存続を願う有志らによって漢方復興運動が興された。1933（昭和８）年頃に春陽堂において『実験漢方医学叢書』を発行する企画が上がった（第１巻鍼灸編，第２巻臨床応用編，第３巻薬物編，第４巻食養編，第５巻薬方解説編）。その中の「薬方解説編」を奥田が担当した経緯は『漢方と漢薬』掲載の大塚敬節のコラム「皇漢医学要方解説を読む」の中に「余は薬方解説編の執筆者として，公景奥田謙蔵大人こそ最適任者であると，進言した。」と記されている[7]。この記載から奥田を著者に推薦したのは大塚であったことが今回判明した。このことは，当時の大塚らを中心とした漢方医の間で，奥田が薬方の分類・解説の適任者であると認められていたためと考えられる。記載によると奥田は大塚より先輩であったこと，『漢方と漢薬』に連載された傷寒論の論考（のちに『傷寒論講義』となった）において実に慎重であり拙速を嫌う推敲熟慮の人であったことが推薦の理由であったと考えられる。しかし，「薬方解説編」の執筆者として指名された学術的理由については記述がなく，不明である。今後のさらなる検討が待たれる。

さて，奥田の処方分類は，いわゆる類方分類に準拠している。『旧皇漢要方』（21分類，157処方＋兼用方23処方）と，その改訂版である『古方要方』（古方/25分類，155処方＋兼用方/５分類，23処方＋家伝方）に採用されている分類項目を，**表１**に示す。二書を比較すると，分類項目に相異点が存在していることが判明した。前者には大陥胸丸類，大陥胸湯類があるが後者にはなく，後者には葛根湯類，五苓散類，大黄消石湯類，黄連湯類，人参湯類，甘草湯類，瓜蔕散類があるが，これらは前者にはない。『漢方古方要方解説』の冒頭（桂枝湯類の本文中）には，処方の分類方針が記されており，「此の部類に属する薬方は，桂枝湯及び其の去加方，並に変方若くは類方，其の他本方と他方との合方と見做すべきものなるも，（中略）此の部類に属するもの凡そ三十六方あり。今其の二十二方を採録す。」とあることから，奥田は主方（中心となる代表処方）の名称を分類項目として立て，その中にその処方の「去加方」「変方」「類方」「他方との合方」を選択して収載していることがわかる（表１）。

また，1954（昭和29）年発行の『傷寒論梗概』[6]薬方編にも，同様の類方分類に基づいた簡潔な処方解説が記載されている（18分類，111処方，家伝方は

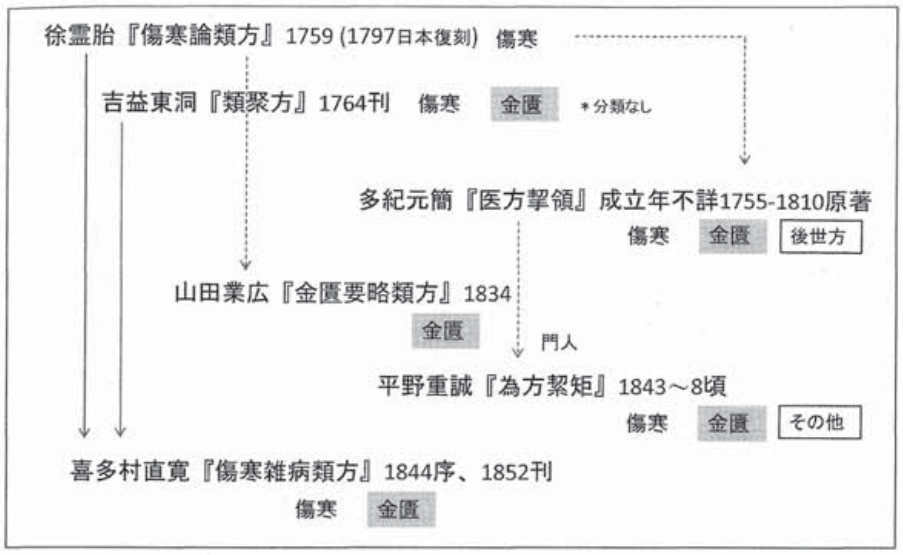

図1 類方に基づいて編纂された処方解説書とその歴史的関連
実線：序文に著者が参考について言及しているもの，点線：参考にした可能性が推定されるもの，傷寒：『傷寒論』，金匱：『金匱要略』。

なし)。ただし，本書は『傷寒論』の解説書であるため，傷寒の処方のみが収載され『金匱要略』の処方は含まれていない。その分類項目を**表2**に示す。本書には，『古方要方』にない，黄芩湯類，理中湯類，陥胸湯類，甘草湯類，桃花湯類の分類項目が採用されている。

『傷寒論梗概』で，処方分類を減じた理由について，鍋谷欣市氏によると「奥田先生は，『傷寒論梗概』では梗概（あらまし）という題名の通り，普及のために簡便化した分類にしたこと，本来の分類は『漢方古方要方解説』に記すものであることを述べていた。」という。

以上，三書における処方の分類を比較すると，分類項目に相違があることがわかる。さらに個々の処方をみると分類の方法にも変更があることがわかる。例えば桂枝人参湯は『旧皇漢要方』『古方要方』では桂枝湯類に含まれ，『傷寒論梗概』では理中湯類に含まれている。四逆散は『旧皇漢要方』『古方要方』では柴胡湯類に含まれ，『傷寒論梗概』では甘草湯類に含まれている。小青竜湯は『旧皇漢要方』では桂枝湯類に含まれ，『古方要方』『傷寒論梗概』では麻黄湯類に含まれているなど，分類項目が同一でない箇所は多数認められる。また，当帰四逆加呉茱萸生姜湯，桂枝麻黄各半湯，桂枝二越婢一湯，牡蛎沢瀉散は，『旧皇漢要方』に非収載だが『古方要方』『傷寒論梗概』にはともに収載されている。このような分類項目や収載処方の違いが認められることから，奥田の試行錯誤の過程が窺われる。

奥田の類方分類の起源に関する検討

奥田が処方分類をするにあたって参考にした書籍があったかどうかを調査，推測するため，日本の江戸期に出された処方集や方剤解説書に見られる処方分類について，検討を行った。

①『類聚方』およびその類書[8)～10)]

『傷寒論』『金匱要略』に用いられている古方を類方ごとにまとめて編纂する試みは，日本ですでに江戸期に始まっていた。その萌芽は吉益東洞（1702－73）の著した『類聚方』（1764）に見られる。東洞は『傷寒論』『金匱要略』の条文を分解し，重要処方113方を選び，処方ごとに類似したものを集めて列記し，薬方の後ろに適応病証が記された条文を配置して再編纂を行った。この編纂方式による処方集は臨床で用いるのにすこぶる便利であったため，たちまち初版本一万部が売り切れたほどに世に広まったといわれ，日本の古方派漢方の代表的処方集として後代に多大な影響を与えた[10)]。その後『類聚方』に倣って，さらに新たに再編纂し直したり，注解を加えたりして類書が作られた。村井琴山『読類聚方』（1780），六角重任『古方便覧』（1782），雉間暘谷『類聚方集覧』（1803），秦恭徳『類聚方弁正』（1827），難波抱節『類聚方集成』（1836序），尾台榕堂『類聚方広義』（1856）等がそれであり，数多

表3 徐霊胎『傷寒論類方』と江戸期の処方解説書四書の分類項目

中国	日本・江戸期			
徐霊胎『傷寒論類方』清代1759	喜多村直寛『傷寒雑病類方』1844序、1852刊	平野重誠『為方絜矩』1843～8頃	山田業広『金匱要略類方』1834	多紀元簡『医方挈領』成立年不詳1755-1810原著
12分類113処方	16分類、271処方	14分類、重要処方150+少数薬味方	22分類、203処方	11分類、616処方
桂枝湯類	桂枝湯類	桂枝湯類方	桂枝湯類	桂枝湯類
麻黄湯類	麻黄湯類	五苓散類方	麻黄湯類	*小半夏湯類*
葛根湯類	葛根湯	*桂枝加芍薬湯類方*	柴胡湯類	理中湯類
柴胡湯類	柴胡湯類	*桂枝加大黄湯類方*	梔子湯類	三黄湯類
梔子湯類	梔子湯類	*桂枝人参湯類方*	承気湯類	*甘桔湯類*
承気湯類	承気湯類	*小建中湯類方*	瀉心湯類	四逆湯類
瀉心湯類	瓜蒂散類	麻黄湯類方	白虎湯類	麻黄湯類
白虎湯類	瀉心湯類	*麻黄附子細辛湯類方*	五苓散類	小柴胡湯類
五苓散類	白虎湯類	*麻黄附子甘草湯類方*	四逆湯類	葛根湯類
四逆湯類	五苓散類	葛根湯類方	人参湯類	*半夏厚朴湯類*
理中湯類	理中湯類（人参湯類）	小柴胡湯類方	防已湯類	白虎湯類
雑法方類	四逆湯類	*大柴胡湯類方*	*百合湯類*	
	半夏湯類	大黄瀉心湯類方	瓜蔕散類	
	甘草湯類	黄連湯類方	*烏頭湯類*	
	芎帰湯類		*茵蔯湯類*	
	雑法方類		*十棗湯類*	
			橘皮湯類	
			腎気丸類	
			備急丸類	
			栝蔞湯類	
			白頭翁湯類	
			雑法方類	

背景グレー：『傷寒論類方』と同一の分類，ゴシック体文字：奥田謙蔵『漢方古方要方解説』に採用されている分類，明朝体文字：奥田謙蔵『漢方古方要方解説』に採用されている分類に類似する分類，イタリック体文字：奥田謙蔵『漢方古方要方解説』に採用されていない分類。

くの書が世に出された。ただし，それらの処方集のいずれにも，いまだ正式な分類項目は付されていなかった。

②考証学者により編纂された類方分類に基づく処方集

吉益東洞が『類聚方』を著す数年前の1759年に，中国で徐霊胎は『傷寒論類方』[11]を著していた。徐氏は本書の中で六経に基づいた分類を用いず類方分類を用い，『傷寒論』の113方を計12類（桂枝湯類・麻黄湯類・葛根湯類・柴胡湯類・梔子湯類・承気湯類・瀉心湯類・白虎湯類・五苓散類・四逆湯類・理中湯類および雑方）の項目ごとに分けて，それぞれの主方の条文を論じ，その後ろに同類方の条文について解説している。この『傷寒論類方』は多紀元簡（1755－1810）によって寛政9（1797）に日本で復刻され日本に広まった[12]。この『傷寒論類方』の分類法の影響を受け，日本でも江戸医学館の考証学派の医家らにより，正式な類方分類を採用した処方集が編纂されていった。多紀元簡『医方挈領』（成立年不詳），山田業広（1808－81）『金匱要略類方』[13]（1834序），喜多村直寛（1804－76）『傷寒雑病類方』[14]（1853序），平野重誠ら『為方悊矩』（1843～8頃）等がそれである。なおこれらのうちの『金匱要略類方』が編纂された理由としては，山田業広は『傷寒論』処方のみを扱っている『傷寒論類方』の不足を補うべく，『傷寒論類方』の方式に倣って『金匱要略』処方を類方ごとの分類に基づいてまとめたものとみられる。（ちなみに，『傷寒論類方』は12項に分類され，『金匱要略類方』は22項に分類されている。）そののち，喜多村直寛は『傷寒論』『金匱要略』にある方の全部を収録し，条文の最後に篇名を入れ，方を15類に類別して，『傷寒雑病類方』を著した。浅田宗伯がその跋文に「徐吉二子（徐霊胎・吉益東洞）に継ぎ，而してこれを集成するもの」と述べていることが，長谷川弥人氏により指摘されている[15]。このように，日本においても江戸後期には『傷寒論』『金匱要略』処方の類方分類に関して，渡来した中国医書の影響を受けながら様々な試みがなされてい

表4 昭和期の各書に見られる方剤分類

奥田謙蔵			矢数道明		大塚敬節	龍野一雄
『皇漢医学要方解説』1934	『古方要方解説』1939	『傷寒論梗概』1959	『漢方後世要方解説』1959		『傷寒雑病論要方解説』1964	『新撰類聚方』1974
21分類、157処方+兼用方23処方	31分類、184処方(古方25分類、155処方+兼用方5分類、23処方+家伝方)	18分類、111処方	治法分類11分類、125処方+主方分類5分類、35処方		16分類、58処方	主薬分類21分類318処方
桂枝湯類	桂枝湯類	桂枝湯類		*補養の剤*	桂枝湯類	*桂枝剤*
麻黄湯類	葛根湯類	麻黄湯類		*瀉火の剤*	麻黄湯類	*麻黄剤*
白虎湯類	五苓散類	葛根湯		*発表の剤*	葛根湯	*瓜蒂剤*
小半夏湯類	麻黄湯類	柴胡湯類		*表裏の剤*	柴胡湯類	*柴胡剤*
柴胡湯類	柴胡湯類	梔子湯類	前篇・略説	*和解の剤*	梔子湯類	*陷胸剤*
橘皮湯類	白虎湯類	承気湯類		*理気の剤*	承気湯類	*芩連剤*
栝蔞薤白白酒湯類	承気湯類	瀉心湯類		*理血の剤*	瓜蒂散類	*梔子剤*
薏苡附子散類	大黄消石湯類	*黄芩湯類*		*潤燥の剤*	瀉心湯類	*橘皮剤*
瀉心湯類	抵当湯類	半夏湯類		*除痰の剤*	白虎湯類	*薤白剤*
白頭翁湯類	瀉心湯類	白虎湯		*消導の剤*	五苓散類	*大黄剤*
梔子湯類	黄連湯類	五苓散類		*その他の薬方*	理中湯類（人参湯類）	*巴豆剤*
大陷胸丸類	半夏湯類	四逆湯類	後篇・詳説	*香蘇散類*	四逆湯類	*石膏剤*
大陷胸湯類	人参湯類	*理中湯類*		*平胃散類*	半夏湯類	*半夏剤*
腎気丸類	甘草湯類	*陷胸湯類*		*二陳湯類*	甘草湯類	*茯苓剤*
防已湯類	四逆湯類	抵当湯類		*四君子湯類*	芎帰湯類	*乾姜剤*
抵当湯類	薏苡附子散類	*甘草湯類*		*四物湯類*	*雑方類*	*附子烏頭剤*
芎帰膠艾湯類	橘皮湯類	*桃花湯類*				*甘草剤*
承気湯類	栝蔞薤白白酒湯類	*類属不詳の方*				*桃仁剤*
赤石脂禹余粮湯類	瓜蒂散類					*芎帰剤*
四逆湯類	白頭翁湯類					*百合剤*
類族不詳の方	腎気丸類					*其他*
兼用方	梔子豉湯類					
	赤石脂禹餘糧湯類					
	防已湯類					
	芎帰膠艾湯類					
	巴豆剤					
	軽粉剤					
	大黄剤					
	甘遂剤					
	雑方					
	付録・草善医院方函雑方					

背景グレー：『傷寒論類方』と同一の分類，ゴシック体文字：奥田謙蔵『漢方古方要方解説』に採用されている分類，明朝体文字：奥田謙蔵『漢方古方要方解説』に採用されている分類に類似する分類，イタリック体文字：奥田謙蔵『漢方古方要方解説』に採用されていない分類。

たことがわかる。これらの歴史的位置付けと関連性を**図1**に示した。これらを見ると，先人の内容を吟味し，分類を継承しながらも，各著者らは新たな分類を模索していることがわかる。

徐霊胎の分類および各書中に採用されている分類項目と奥田のそれとの比較を**表3**に示す。

奥田の『古方要方』分類は，徐霊胎の分類のすべてを含み，喜多村直寛の分類をさらに増補したものであるのがわかる。奥田の弟子のひとりである長濱善夫は，自身の著作『東洋医学概説』〔昭和36(1961)年発行〕の，「薬方の分類」に関する補足（318頁）の中で，「1．傷寒論・金匱要略所載の薬方分類」として喜多村直寛『傷寒雑病類方』の分類を，「2．後世方の薬方分類」として汪昂『医方集解』の分類（991方を21類に類別）を提示している。これから推測すると，奥田は喜多村直寛『傷寒雑病類方』の分類を重視した可能性が高いと考えられた。

昭和期における奥田謙蔵以外の医家による処方分類との比較（表4）

昭和初期の漢方復興運動が興った頃には，漢方医学の教育・普及のためにその内容を体系的にまとめた書が多く世に出された。奥田謙蔵の後，大塚敬節，龍野一雄，矢数道明らが，それぞれの著書の中で方剤を分類して解説を行っている。

①古方の類方分類

大塚敬節は喜多村直寛『傷寒雑病類方』の分類に準じた形式で，1964（昭和39）年に『傷寒雑病論要方解説』[16]を著し，『傷寒論』『金匱要略』の要方58処方を16分類に分けて解説している。一方，龍野一雄は主薬（君薬）に基づいて処方分類を行い，『新撰類聚方』[17]〔1974（昭和49）年〕の中で主薬に基づいて21分類に類別して，318処方を解説している。龍野は分類方法に関して，「処方の構成を第一とし，証を第二とし，問題になるものは臨床上の便宜を考慮して分類することにした」と記している。

②後世方の類方分類

後世方の処方に関しては，矢数道明が『漢方後世要方解説』[18]〔1953（昭和28）年〕を著し，その中で『医方集解』に準じた治法に基づく11分類（方剤の薬効別分類）の125処方と（『医方集解』は21分類991処方を収載），主方に基づく5分類の35処方を解説している。『漢方後世要方解説』という書名に関しては，互いに分類法が異なるが奥田の『旧皇漢要方』の復刻版書名（『漢方古方要方解説』）へ影響を与えた可能性があるものと推測される（復刻版は昭和49年発刊）。

結語

日本では江戸期～昭和期にかけて，「病証」・「主方（類方）」・「効能（治法）」等，様々な分類に基づいた処方分類法が試みられていた。しかし，江戸中期以降の日本においては，臨床実践を第一として方証相対を重んじた古方派が盛んになった特徴的な背景から，類方の考え方に基づいた薬方書が多くみられるようになった。類方分類は方証相対の基礎として，方剤の方意と適応証を把握するうえで有用なツールとなり，また方剤の薬物組成の研究においても重要だと考えられる。昭和初期に至っても，奥田謙蔵らによる古方の類方分類は，漢方医学の教育・普及および臨床応用において大きな役割を担っていた。だがそのような利点はあるが，類方分類はいまだ根拠が脆弱で，かつ分類不能なものもある等限界もあり，また恣意的である点も否めない。さらに，その分類範囲は古方のみに限られており，後世方，中医処方，新たな創考による処方のすべてに応用できないこと等が，問題点としてあげられる。

一方，中国では国家規劃教材『方剤学』に採用されている「治法分類を主とした総合分類法」が処方分類法の主流となっている。この分類法は幅広い処方に応用可能な分類方法ではあるが，その中に方証相対や類方分類の考え方は全く含まれていない。

類方分類は臨床的な意義が大きく，処方の組成と効能を研究するのにも有用性が高いと思われる。今後我々は日本漢方独自の優れた類方分類の経験を改めて整理し直し，その成果を多様性ある伝統医学の処方分類法の確立に活かす必要があろう。それによって国際的な伝統医学標準化作業における方剤分類の作成においても，積極的な貢献ができると考える。

謝辞 江戸期の背景について北里大学東洋医学総合研究所・医史学研究部，小曽戸洋部長にご確認とご助言をいただきました。ここに感謝の意を表します。

参考文献

1）藤平健・山田光胤監修，日本漢方協会編集：実用漢方処方集（改訂三版），じほう，東京，2006
2）奥田謙蔵：傷寒論講義，医道の日本社，東京，1965
3）秋葉哲生：奥田謙蔵研究，東京文芸館，東京，2000
4）奥田謙蔵：実験漢方医学叢書，第5，薬方解説編，皇漢医学要方解説，春陽堂，東京，1934
5）奥田謙蔵：漢方古方要方解説，医道の日本社，東京，1973
6）奥田謙蔵：傷寒論梗概，医道の日本社，東京，1954
7）大塚敬節：皇漢医学要方解説を読む，漢方と漢薬，1(3)，315，1934
8）小曽戸洋：日本漢方典籍辞典，大修館書店，東京，1999
9）長谷川弥人：類聚方とそれに続くもの，漢方の臨床，32(12)，789，1985
10）吉益東洞：類聚方，歴代漢方医書大成，新樹社書林，東京，2008
11）徐霊胎：傷寒論類方，徐霊胎医書全集，山西科学技術出版社，太原，2001
12）多紀元簡覆刻，徐霊胎：傷寒論類方，京都書肆，1797
13）山田業広：山田業広漢方原典集成，第5冊，金匱要略類方，オリエント出版社，1998
14）喜多村直寛：傷寒雑病類方，学訓堂，江戸，1853(序)
15）長谷川弥人：古医書の散策，漢方の臨床，30(12)19，1983/31(1)19，1984
16）大塚敬節：傷寒雑病論要方解説，たにぐち書店，東京，2010
17）龍野一雄：新撰類聚方，漢方医学大系第十四巻，雄渾社，京都，1978
18）矢数道明：漢方後世要方解説，医道の日本社，東京，1959